

# 就学前教育と小学校の接続・連携に関する調査研究

——「松江市保幼小接続カリキュラム」の検討を通して——

赤木 信介\*<sup>1</sup>・田部 絢子\*<sup>2</sup>・石川 衣紀\*<sup>3</sup>・内藤 千尋\*<sup>4</sup>・高橋 智\*<sup>5</sup>

## 特別ニーズ教育分野

(2015年9月15日受理)

### 1. はじめに

「小1プロブレム」への対応として、就学前教育と小学校教育の接続・連携への関心は全国の自治体において高まっている。例えば、全ての都道府県、99%の市町村（政令都市、中核都市含む）が幼小連携・接続の重要性を認識している。しかし、教育課程上の接続のための取り組みは、都道府県の77%、市町村の80%で未実施である（文部科学省：2010）。

文部科学省の「幼児教育振興アクションプログラム」（文部科学省：2006）において「幼児教育と小学校教育との連携を推進するとともに、未就園児の円滑な幼稚園就園を進めることにより、幼児の発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実を図る」とあることから、幼児教育には小学校教育とのつながりを意識した教育課程の編成が求められている。小学校第1学年の教育課程の編成は、2008年改訂の小学校学習指導要領において「生活科を中心としたスタートカリキュラムの編成」（文部科学省：2008）が記述されており、幼小の接続・連携に関わる教育カリキュラムの編成は重要な課題となっているが、これまでに十分な検討がなされていないという現状にある。

そうしたなかで、現代の幼児児童に顕著な身体の発育・発達の困難に着目し、幼小の接続・連携カリキュラムの開発に取り組んでいるのが鳥根県教育委員会と松江市教育委員会である。「身辺の処理」「遊び」「学習」などの子どもの活動は、感覚刺激（入力）からの情報処理、筋運動（出力）というサイクルによって成り立っているが、感覚運動機能に何らかの問題があると社会生活や学習に適応することが困難となり、そうした幼児児童の身体の発育・発達の困難が小1プロブレムの一要因として考えられている（鳥根県教育センター：2008）。

幼児児童の身体の発育・発達の困難への対応は、学校適応カリキュラムでは十分にカバーしきれない。例えば、年長児18名のうち三分の一がバランス、指示に合わせる、ボディイメージの獲得が未通過であり、体をまっすぐにして腕立ての姿勢を保てたのは2名であったという報告もある（鳥根県教育センター：2009）。そのような身体の発育・発達の困難に対して、感覚運動機能の発達をめざしたサーキット活動などの取り組みにより「話を聞く態度が良くなった」などの効果がみられたという（鳥根県教育センター：2010）。

このような調査結果から、幼児児童の身体の発育・発達に着目して作成されたのが松江市教育委員会の「松江市保幼小接続カリキュラム：すくすくアプローチ!わくわくスタート!」（松江市教育委員会：2013）である。本カリキュラムには「かしこい体」＝「学習に向かうための力の基盤が整っている体」（「必要な感覚運動機能

\*1 鳥根県松江市立法吉小学校（690-0863 松江市比津町532）

\*2 大阪体育大学教育学部（590-0496 泉南郡熊取町朝代台1-1）

\*3 長崎大学教育学部（852-8521 長崎市文教町1-14）

\*4 白梅学園大学子ども学部（187-8570 小平市小川町1-830）

\*5 東京学芸大学 特別支援科学講座 特別ニーズ教育分野（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

の統合がなされている体」「話し手の方を見て、言っていることを聞き、理解して行動することが円滑にできる体」として、就学前のタオル遊びや小学校でのサーキット活動など、感覚運動機能発達のための活動が多く提示されている。

しかし、本カリキュラムは開始されたばかりで、その成り立ちや内容の検討、実際の取り組みの成果や課題についての評価はまだ十分に行われていない。そこで本稿では子どもの身体の発育・発達に着目して作成された「松江市保幼小接続カリキュラム」の成り立ちや内容の検討を行うとともに、松江市の幼稚園・保育所・小学校における「松江市保幼小接続カリキュラム」の実際の取り組みの成果や課題についての調査を通して、子どもの身体の発育・発達に焦点をあてた接続期の発達支援の意義や課題について明らかにする。

なお「松江市保幼小接続カリキュラム」の調査は、松江市の公立幼稚園・保育所4園、公立小学校4校、松江市教育委員会を対象に、半構造化面接法調査により実施した。調査期間は2014年11月10日～11月13日である。

## 2. 「松江市保幼小接続カリキュラム」の成り立ち

松江市では「松江市保幼小接続カリキュラム」作成以前からも保幼小中一貫教育をめざした取り組みを進めており、加えて就学前からの特別な支援の必要な幼児児童への早期支援を積極的に行っている。松江市には34校（分校を除く）の公立小学校があり、すべての小学校において、その敷地内もしくは近隣に公立幼稚園が設置されている。さらに公立幼稚園7園に「特別支援幼児教室」が設置されており、3歳～小学校入学前までの特別な配慮が必要な幼児に対して、小学校の通級指導教室と特別支援学級の担当教員が支援を行っている。また、2011年に発達支援センター「エスコ」が松江市教育委員会の管轄下に設置されている。

こうした取り組みの背景として、小学校入学後において集団生活に馴染めない子どもが増加していること、幼児期の子どもの取り巻く環境が大きく変化して、子育てに不安を持つ保護者が増えていることなどが指摘されている。2011年10月に松江市教育委員会が実施した「保・幼・小の連携について」の調査結果では、「集団行動が出来にくい子どもがいるか」や「友達との関わり（気持ちをことばで伝える、友達の気持ちも考えようとするなど）」について、うまく関わることができにくい子どもがいるか」等で心配な点が多いという結果が出ている（図1）。

保・幼・小の連携について（平成23年10月アンケート調査）概要		資料No. 2
○調査対象：松江市立小学校の34校（東山栗町の3小学校含む、分校除く） ○調査時期：平成23年10月 ○学級内のおよそ人数は、複数クラスある場合は平均を記入。		
(1) 今年度（平成23年度）の「小学校1年生」の状況について ※昨年度調査（32歳）		
① 担任校では「小1プロブレム」を感じますか。	ア、ある 9/26	イ、ない 25/26
② 基本的な生活習慣（あいさつ、聴眼、食事、排便、洗顔、手洗い、着替え、整理整頓など）について	○子どもたちに身につけていないと感じることが ア、ある 28/30 イ、ない 6/30	
○気になる子どもは、学級に、約（3.5人程度）		
③ 担任や学級の友達の話を聞いて最後まで聞くことについて	○子どもたちに身につけていないと感じることが ア、ある 26/27 イ、ない 8/27	
○気になる子どもは、学級に、約（3.0人程度）		
④ 授業中の態度について	○授業中に立ち歩く子どもが ア、いる 9/12 イ、いない 25/30	
○気になる子どもは、学級に、約（0.4人程度）		
○授業中に悪態を吐く子どもが ア、いる 5/9 イ、いない 29/30		
○気になる子どもは、学級に、約（0.1人程度）		
○集団行動ができない子どもが ア、いる 15/22 イ、いない 19/20		
○気になる子どもは、学級に、約（0.7人程度）		
⑤ 友達との関わり（気持ちをことばで伝える、友達の気持ちも考えようとするなど）について	○友達とうまく関わることでできにくい子どもが ア、いる 22/23 イ、いない 12/23	
○気になる子どもは、学級に、約（1.5人程度）		
⑥ 1年生保護者の授業公開日への参加について参加者数は平均して、学級の	ア、ほぼ全員（18）/26 イ、2/3以上（16）/26 ウ、半数以上（0）/26 エ、半数以下（0）/26	
⑦ 1年生保護者の学級懇話会・説明等への参加について参加者数は平均して、学級の	ア、ほぼ全員（3）/4 イ、2/3以上（6）/9 ウ、半数以上（11）/14 エ、半数以下（14）/14	
⑧ ①～⑦の全般で、その他気になること、以前と比べて感じていること などを自由記述へ別紙にまとめ		
(2) 保・幼・小の連携について		
① 入学前に、保育所や幼稚園と「子どもの様子」についての情報交換の機会を設けている	18校/21回 /年回数 12校/2回 /年回数 4校/3回以上 /年回数 0校 /年回数	していない
② 保育所や幼稚園と、「保育」や「教育」に関わる情報交換や共通理解等を図る機会を設けている	12校/2回 /年回数 14校/2回 /年回数 5校/3回以上 /年回数 3校/2回 /年回数	していない
③ 入学前に、就学前の子ども向けの日一入学を行っている	23校/21回 /年回数 0校/2回以上 /年回数 11校/0回 /年回数	していない
④ 入学前に、保護者向けの説明会（小学校でのくらしや学習についての説明等）を行っている	34校/21回 /年回数 0校/2回以上 /年回数 0校/0回 /年回数	していない
⑤ 保育所や幼稚園の幼児と小学生の交流活動などを行っている	12校/1回 /年回数 7校/2回 /年回数 11校/3回以上 /年回数 3校/2回 /年回数	していない
⑥ 保育士や幼稚園教員との授業や活動の合同研究会を行っている	5校/1回 /年回数 7校/2回以上 /年回数 22校/0回 /年回数	していない
⑦ その他、保・幼及び保護者との連携に関して取り組んでいることや課題 などを自由記述へ別紙にまとめ		

図1 「保・幼・小の連携について（平成23年10月アンケート調査）概要」

このような調査結果から、保育所・幼稚園と小学校の円滑な接続を図るためのカリキュラムを作成することが望まれた。カリキュラムは2011年11月に松江市保幼小中連携推進委員会が組織され、作成が進められた。カリキュラムのうち「生活する力」「学ぶ力」は作成当初から決定していたが、「かしこい体」については保育所からの要望が強く、2012年度末に「体」づくりに取り組んでいたA小学校を視察した際の子どもの様子から、カリキュラムに取り入れることを決めた。

A小学校では、2010年度～2011年度に島根県教育センターの研究指定校として、2012年度～2013年度に松江市児童発達支援センター「エスコ」の研究指定を受けて、「体」づくりに取り組み、「松江市保幼小接続カリキュラム」の「かしこい体」の内容のモデル校となっている。

カリキュラムに「体」づくりを取り入れるメリットとして、①カリキュラムに明記することで「体」づくりを学校全体での取り組みとすることができる、②幼児期からの支援が学力向上につながる、③一斉指導のなかで、発達に遅れのある幼児・児童への支援が可能であるという3点が挙げられた。

2013年11月に松江市内の全ての保育所・幼稚園・小学校の園長・校長を対象に「松江市保幼小接続カリキュラム」の配布および説明が行われた。さらに、2014年度からは松江市のホームページにも掲載されている。2014年10月には松江市内の全保育所・幼稚園・小学校の教職員を対象に保幼小接続カリキュラム研修会が行われた。

### 3. 「松江市保幼小接続カリキュラム」の内容

#### 3. 1 「かしこい体」

保育所・幼稚園では、体のバランスをとる動き、体を移動する動き、用具などを操作する動きが身につけたい動きとして設定されている。指導のポイントは、多様な動きの経験ができているか（片足立ち、スキップ、両足跳び、ゆっくりとした動き、鉄棒やマットを用いた遊び、土踏まずの形成など）である。幼児期には運動感覚の獲得ではなく、多様な動きを楽しみながら経験することで、見る、聞く、触れるという基本的な感覚の習得をめざす。

小学校では、体のバランスをとる運動、体を移動する運動、用具を操作する運動、力試しの運動、基本的な動きを組み合わせる運動が身につけたい動き（運動）として設定されている。指導のポイントは、体の動きがどの程度できているかチェックする（体を止める、支える、足裏で踏ん張る、左右の空間をしっかりと使うなど）である。幼児期との運動の違いとして、力試しの運動、基本的な動きを組み合わせる運動が設定されているが、これは小学校の学校生活の中で、全校集会にて前後左右の間隔をあけて並ぶ、板書をノートに書き写すといった動きが必要になるためである。そのため小学校でのねらいは、見る、聞く、触れるという基本的な感覚を高め、基礎感覚から粗大運動、協応運動へと発展させることをめざした動きを繰り返し経験させるものとなっている。

このような身体感覚や身体の動きを接続期のカリキュラムの基本として取り入れているのは、全国の各種の教育委員会において確認できたのは「松江市保幼小接続カリキュラム」のみである。

#### 3. 2 生活する力

##### ① 生活習慣

保育所・幼稚園では、小学校への就学を意識し、1日の生活リズムを身に付ける、手洗い、うがい、歯磨き、着替えなどを進んで行う、持ち物の整理や後片付けを力を合わせて行うことがねらいとなっている。重点として、生活リズムでは、早寝早起きのリズムが整い、朝食後に排便できるようにする。給食・弁当では、手洗い、うがい、歯磨きの大切さが分かり、進んでできるようにする、その子に応じた配食をし、一定量を食べられるようにする。排泄では、和式・洋式トイレの使い方を身につけるようにする。身辺自立では、脱いだ服をたたんだり、脱いだ靴を決められた場所へしまうことができるようにする等が挙げられている。

小学校では、手洗い、うがい、歯磨き、着替えを進んで行うという保育所・幼稚園と同様のねらいに加え、登下校時の支度、所持品の管理、必要な学習用具の準備を進んで行うなど、「環境」が設定される保育所・幼稚園から「環境」を自ら整える小学校での目標となるように変化している。

## ② 環境への適応

生活習慣と重複部分はあるが、生活習慣は小学校でスムーズに適応して生活していくためのカリキュラムとすると、環境への適応は、小学校の生活時程や集団登下校といった集団生活の流れの違いに対して、集団の中でどのように適応していくかについてのカリキュラムである。例えば、保育所・幼稚園では、椅子や机を用いた生活を経験する、散歩時に一列に並んで歩いたり、自分の判断で道路を渡る経験をする、午睡のない生活に慣れるよう徐々に午睡の回数を減らすなどが重点として挙げられている。このような活動のねらいは、午前・午後を通して活動が行われる小学校での1日の生活の流れを意識する、椅子や机を使った活動に慣れる、歩いたの登下校を意識させるといったことである。

小学校では、生活時程について朝の会で1日の活動の流れを確認する、45分の学習時間の設定を児童の実態に応じて柔軟に学習時間を工夫するなどが重点として挙げられている。生活環境に関しては、個人の机と椅子が決められており、基本的には黒板を向いて学習に取り組むが、目的に応じて机の配置や座り方を変え、机と椅子での学習に慣れるようにする、壁面掲示は構成を工夫するなどが挙げられている。集団登下校に関しては、一緒に歩いたり、あいさつ指導をしたりして、丁寧に安全指導を行うことが挙げられている。

## ③ 人との関わり

この項目では、あいさつ・返事、仲間づくりの二つが設定されている。幼稚園・保育所では、人とのふれあいを喜び、気持ちのよいあいさつや返事ができる、友達と一緒に遊んだり、共通のイメージやめあてをもって活動する、保・幼の交流や小学校との交流・訪問を通して、新しい友達に出会ったり、一緒に活動する等が設定され、担任との信頼関係を基盤として、様々な人とふれあう体験をさせることが基本的内容である。

小学校では、自ら進んで気持ちのよいあいさつや返事ができるようになる、新しい先生や友達と、ふれあいながら徐々に親しみがもてるようになる、学級やグループ、集団登校などいろいろな場で、人とふれあう楽しさを味わうことがねらいとして設定されている。

幼稚園・保育所との内容変化は、状況や場に応じたあいさつがあることを知る、学級での当番活動や縦割り班での活動(掃除、登校班)など、小学校ならではの活動の中でさまざまな人とふれあうとともに、小学校の一員になった喜びを味わえるようにしていくといったことが挙げられる。

## 3. 3 学ぶ力

### ① 聞く、話す

「かしこい体」「生活する力」を基盤として、小学校での学習場面に必要な話す・聞く力を育む。幼稚園・保育所の取り組みの重点は、椅子に座って話を聞く機会を増やす、話を最後まで聞いてから次の行動に移す、自分の気持ちや考えを自分なりの言葉で話す機会を設け、話を聞いてもらう喜びを経験できるようにするなどが挙げられている。

小学校では話す人の方に体、顔、目を向けて聞くように指導する、納得・共感したら頷くなど反応しながら聞く、言いたいことを順序立てて最後まではっきりと話す、友達の使った言葉を自分も使えるようにする等が指導の重点として挙げられている。幼稚園・保育所では、自分の思いをしっかりと伝えられることが大切にされているが、小学校では聞き方・話し方のルールを加え、集団において適した話し方ができることをめざしている。

### ② 学び

幼稚園・保育所では、身近な環境や様々な事象に積極的に関わり、その特性に関心を持ったり遊びに取り入れる、いろいろな素材を用いて遊びに使うものを作ったり、音楽やリズム、描画などの表現活動に取り組む、友達とのかかわりを深める中で自ら行動し、仲間と一緒に試行錯誤しながら活動を展開する(協同的な遊びの経験)などが挙げられ、遊びを通してさまざまなことに関心を持ったり、さまざまな生活経験、感覚を身に付けることをめざしている。

小学校では、教科書や教材などに触れ、小学校の学習に関心をもつ、鉛筆やノートなどを使って絵や形を書いたり、なぞり書きをしたりする、教室や構内にある文字や表示、数字等に関心をもつ、学校生活を一緒に過

ごす友達や先生, 施設に関心を持ち, 関わろうとすることがねらいとして設定されている。幼稚園・保育所での遊びを通しての関心から, 小学校での学習の中から関心をもたせるという変化が見られる。

### 3. 4 かしこい体プログラム

「かしこい体プログラム」とは、接続期よりも長いスパンで子どもの体・動きづくりを指導するプログラムである。「かしこい体」を「学習に向かうための力の基盤が整っている体」として、「かしこい体」を育むためには「支える→構える→調整する」という三つの過程の動きの経験が必要であると述べられている。

人は重力に抗して、自分の体を支えて初めて、その他の部位も思うように動かせるようになる。自分の体重を支えながら、様々な動きを可能にするためには、常に重心を保つことが必要であり、これがバランスである。つまり、「支える」とは粗大運動・姿勢制御の力である。十分に支えることが可能になると、しっかりと対象を見て結果を予測し、予測に合わせて自分の体を作っていくことができるようになる。これが「構える」ことのできる体であり、協調運動と言い換えられる。「調整する」とは、見たり聞いたりして得た情報に反応できるように、体の各部位のチームワークをとっていく力である。具体的には、右手と左手を別々に協調させて動かせる力である。学習において、曲線やはねなどの細かな動きを可能にするにはこの力が必要となる。これらの一連の動きを様々な動きの中で経験することで「かしこい体」は育まれる。

## 4. 松江市の小学校における「保幼小接続カリキュラム」の現状調査の結果

### 4. 1 松江市立A小学校

2014年11月11日に調査訪問(9:00～10:30)して、A小学校教頭に半構造化面接を実施した。A小学校の児童数は358名、松江市内では中規模校。「体」づくりの取り組みは2010年度から鳥根県教育センターの研究指定校として取り組んでおり、松江市内で「体」づくりの中心的学校である。研究指定を受けた当時は、松江市内でも荒れている学校という評価を受けていた。

#### ① 子どもの実態

「体」づくりの取り組みを始めた当初、子どもの実態として「集会中うるさい」「三角座りの姿勢の保持ができない」「椅子に座っている姿勢も保持が難しく集中できない」「自己表現が苦手」等が挙げられた。また「体」づくりのスーパーバイザーからは「左右の認識や左右の分離運動が難しいため、文字の習得や定規で線を引くこと、リコーダー奏が難しい」「目と体の分離運動ができないため、黒板を見ることに必死な状態である」「じっと座っていることが難しいため、聞き落としが多い」「自分のボディイメージが持てないために、注意されても自分のことと受け止められない」といった様子が挙げられた。その背景には、「校区内に自然が少なく、子どもたちが生き物と触れ合ったり、思いっきり駆け回れる遊び場が少ないこと」「室内での遊びに終始しがちな子どもも多く、遊びを通して身に付ける力が十分備わっていないこと」が指摘された。

#### ② 「松江市保幼小接続カリキュラム」の実施後

「体」づくりはA小学校の取り組みがモデルとなっているため、カリキュラムが実施されたことで大きく変わったことはない。しかし、「幼稚園との交流活動や教員間での話し合いの際に子どもを見る視点、つまり子どもの実態把握の方法が揃うようになった。カリキュラムに沿って話し合うので、中身が充実している」と述べられた。

一方、保幼小接続カリキュラムのうち「生活する力」「学ぶ力」について、学校としてスタートカリキュラムを作成はしておらず、各学級担任の指導に任せている状況である。学校全体としては児童の実態把握に重点を置き、その上で「体」づくりをどのように進めていくかについて共通意識を持ち、取り組んでいる。「生活する力」「学ぶ力」については、まさにこれから「授業」づくりを進めていく上で課題となると述べられた。

#### ③ 「体」づくりの取り組み

子どもの実態把握のため、新体力テストの結果分析、鉄棒(逆上がり)、一輪車の達成率について全学年で

実態調査を行う。それに加えて1・2年生は、5月・11月にグッドイナフ人物画検査、5月に健康診断と併せて眼球運動検査、5月に調整力テストとしてひし形の模写、なぞり書きを行う。

グッドイナフ人物画検査については、1・2年生担任が実施し、職員会議の際にグッドイナフ人物画検査の研修も兼ねて全教員で分担して採点を行う。これにより全教員で子どもを把握するという意識が生まれた。眼球運動検査については、特別支援学級担任、通級指導教室担当者が実施し、評価基準を基に採点を行う。調整力テストについて、ひし形の模写は田中ビネー知能検査の得点基準を参考にし、2点と0点の評価を行う。なぞり書きは、できているが2点、線が壁に触れているが1点、線が壁からはみ出している、始点、終点を両方とも又は片方が飛び出しているが0点として採点する。

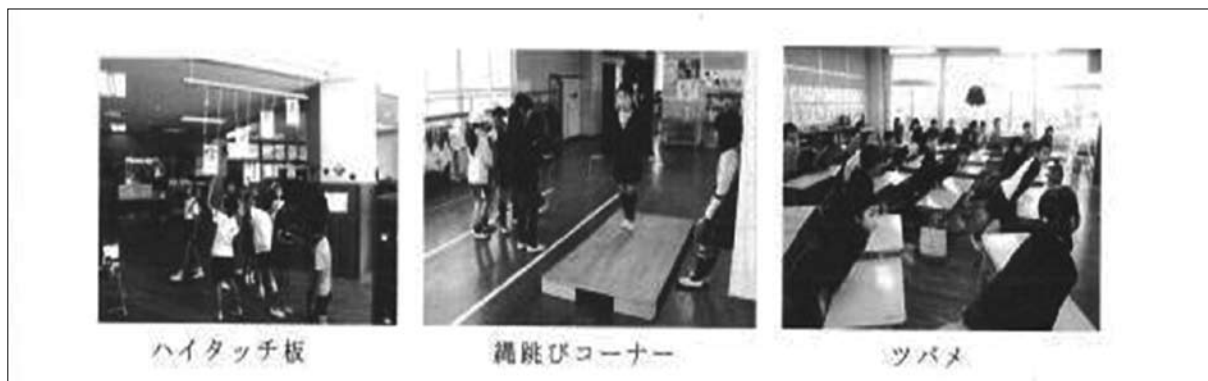
このような実態把握をもとに、体育の授業中、学校生活の中での「体」づくりを行っている。体育の授業中には「支える」「バランス」「逆さ・回転」「柔軟性」「投げる」の5つの要素の動きを、各30秒×6セット（長く行いたい動きは1分）の音楽に合わせて行う。それぞれの動きは低学年と中学年、高学年で分かれており、高学年では五つの要素から、陸上運動、ボール運動、器械運動の3領域の運動へと内容が変化している（図2）。また、体育館バージョンと校庭バージョンに動きも分かれている。

学校生活の中での「体」づくりとして、ツバメの姿勢、朝礼での体操や帰る前のハイタッチ、立っての更衣や片付けの指導を行うとともに、体育館の壁に的当て、昇降口にハイタッチ板、階段に1段飛ばし、つま先歩きといった指示、ピロティにラダーを設置するなど、子どもが遊びたくなる環境づくりも積極的に行われている（写真1）。

中央小学校 高学年『中央っ子サーキット』		
陸上運動	ボール運動	器械運動
<b>【走る】</b> ・スキップ ・クロスステップ ・サイドステップ（左右） ・大また走 ・胸振りもも上げ歩行 ・リズム走（だんだん速く）	<b>【バスケットボール型ゲーム】</b> ・世界一周（長座でボールを体の周りを転がす） ・8の字ボール ・右手・左手でドリブル ・両手で交互にドリブル ・フリースロー	<b>【マット】</b> ・ゆりかご ・V字バランス ・カエルの足うち ・ブリッジ ・アンテナ（首倒立） ・3点倒立
<b>【跳ぶ】</b> ・もも上げジャンプ ・両足とび ・ケンケン走（左右） ・1・2・3ジャンプ （片足踏み切り）	<b>【バレーボール型ゲーム】</b> ・もも上げジャンプ ・ターンキャッチ ・トス&キャッチ （後ろから前へ、前から後ろへ） ・ジャンプしてキャッチ ・アンダーハンドからキャッチ	<b>【跳び箱】</b> ・うさぎとび ・カエルとび ・胸立て伏せ ・バービー ・もも上げジャンプ ・馬とび（二人組）
<b>【投げる】</b> ・キャッチボール（玉入れ用） ・タオルピッチング ・スカッドボーイ ・フリスビー	<b>【サッカー型ゲーム】</b> ・投げあげてトラップ ・シザース（ボールをまたぐ） ・蹴り上げてキャッチ（インステップ、インサイド、もも、頭…） ・ドリブル（右、左） ・リフティング	<b>【鉄棒】</b> ・つばめ ・つばめ振り ・つばめ振りから足うち ・バタ足・自転車こぎ ・ふとん干し ・だんご虫

出典：松江市立A小学校（2014）『平成25年度研究集録』

図2 高学年の運動



出典：松江市立A小学校（2014）『平成25年度研究集録』

写真1 「体」づくりの例

また全校集会の際にマーカーで前後の距離を意識させる取り組みや、その様子をその後の全校集会で児童に紹介するという取り組みも行っている。さらに「中央っ子体づくりチャレンジカード」という種目チャレンジカードで、カードのすべての種目を達成すると学校長より名人認定証をもらえるという取り組みである。

全校での取り組みとして「ちゅうオリンピック」という活動がある。これは1～6年生までの縦割り班のメンバーで、月に1回、月曜日6校時を利用して、班ごとにさまざまな遊びを行うという活動である。遊びの種類は外バージョンと中バージョンが用意され、外バージョンでは「フリスビー」や「しっぽとり」、中バージョンでは「なわとび」や「めんこ」などの活動がある。ちゅうオリンピックの予定は学年便りによって家庭に知らせ、ちゅうオリンピックは参観・参加可としている。

「体」づくりで取り組んでいることは、子どもを当たり前の姿へ引き上げるだけで特別なものではない。現在の課題としては「研究指定も含め4年間「体」づくりを行ってきて、授業を集中して受けられる子どもが増えてきた中で、それに応えられる授業づくりを進めていかなければならない」「何をしているのかが分かりにくい取り組みなので、新任の先生などに共有し、意識して続けていく工夫が必要」等が挙げられた。

#### ④ 「体」づくりによる子どもの変化

4年間の取り組みを通して、子どもの変化として「身のこなしがしなやかになってきた」「体を動かして遊ぶ子が増えてきた」「新しいことに興味を持って取り組むようになってきた」「集会時の姿勢がすばらしくよくなった」「ボール運動への抵抗感が減った」「子どもが自分の体の状態を意識するようになった」等の回答があった。

また子どものケガに関して「外で遊ぶ子どもが増加したことで擦り傷、切り傷が増えたものの、不器用さからくる打撲などは減った」「不登校の児童が減少した」という回答もあった。さらに「体」づくりに取り組むことで「運動の系統性などの整理・分類することができた」「子どもの様子、実態について気付かなかったことに目がいくようになった」「子どもの様子を見ながら、できないことの根底にあるものを探ることを心がけた」「子どもたちの体づくりについて、目に見えるものではないので伸びがわかりにくい、絵や切り絵など形で見えるもので評価することが大切と分かった」といった教員の意識変化も多く回答された。

### 4. 2 松江市立B小学校

2014年11月11日に調査訪問(16:40～17:20)して、B小学校1・2年生学級担任に半構造化面接を実施した。B校の児童数は590名、松江市内では大規模校。「体」づくりの取り組みは、2014年度から3カ年の研究指定を受け、低学年の担任を中心に取り組みを始めた段階である。

#### ① 子どもの実態

子どもの実態として「姿勢保持ができない」「じっと座ってられない」「思いついたらしゃべる」「読み聞かせであれば聞けるが話を最後まで聞かない」「箸、鉛筆がうまく持てない」「歩く経験が少ないため歩けない」「何かにすぐすがる」「筋力、関節が未発達」「転んでも手をつけない子が多い」「学習以前のところができていない」と回答された。

#### ② 「松江市保幼小接続カリキュラム」の実施後

「左右感覚が未発達でしっかりとできていない子に整理整頓は難しいなど、発達の背景を見るようになった」「子どもの実態把握についての教員間での話し合いの土台になる」「6歳児として当たり前のことができていないということを改めて認識することができた」「取り組みを進めていく上で時間的、金銭的負担の少ない内容になっており、授業や学校生活のすき間時間をうまく使うことで、各学級の様子に合わせて取り組める」等が回答された。

#### ③ 「体」づくりの取り組み

子どもの実態把握は、7月に1年生の直進歩行の様子を一人ずつ撮影・記録を行う。大学教員によるスーパーバイズとともに、全体研修を行い、見立てに関する情報共有を行っている。体育の授業、学校生活の中で

「体」づくりが行われている。体育の授業では「中央っ子サーキット」を参考に、音楽に合わせて「片足バランス」「くも歩き」「スキップ」などのサーキット活動を行っている。学校生活では、授業の始めや朝の健康観察、終礼の時間を使ってツバメの姿勢、片足バランスを行うとともに、階段に1段飛ばしやつま先歩きの指示、体育館に的当て、ハイツタッチ板の設置といった環境づくりも行っている。また「わくわく遊び塾」という全校での遊び活動も月1回行っている（写真2～写真5）。



写真2 三浦慶子氏より提供 (2015年1月30日)



写真3 三浦慶子氏より提供 (2015年1月30日)



写真4 2015年1月19日松江市立B小学校にて撮影



写真5 三浦慶子氏より提供 (2015年1月30日)

#### ④ 「体」づくりによる子どもの変化

「片足立ちができる子どもが増えてきた」「姿勢が良くなった」「子どもたちが自分の体を意識するようになった」「子どもの発達の背景を意識するようになった」という変化が挙げられた。

### 4. 3 松江市立C小学校

2014年11月12日に調査訪問 (9:00～10:15) して、C小学校長に半構造化面接を実施した。C小学校は松江市西部の温泉街に位置し、児童数は304名、松江市内では中規模校。「体」づくりの取り組みは、2014年度から3カ年の研究指定を受けている。

#### ① 子どもの実態

「姿勢が崩れる」「45分間集中できない」「C小学校の校区は比較的自然豊かな場所ではあるが、学校から帰って、友達と集まって外で遊ぶという姿が見られなくなった。そのためA小学校での取り組みには以前から注目をしていた」と回答された。



## ② 「松江市保幼小接続カリキュラム」の実施後

「子どもの実態と合っていたので、詳しい理論はわからなかったが必要だということが納得できた」「子どもの見方が変わった」「当たり前を意識するようになった」「幼小でのつながりが分かりやすい」「C小学校内での情報共有がしやすくなった」「『体』づくりや食育について、C小学校の子どもの特性を見つめ直し、本カリキュラムを土台として話し合えるようになった」「実施にあたってとくに負担はなく、生活の中での見方・意識を変えればよいので教室で行える」「幼少期からの体幹の強化が必要であると感じた」等が回答された。

## ③ 「体」づくりの取り組み

子どもの実態把握について、鉄棒（逆上がり）、一輪車の達成率の把握、体力テストの分析を行った。年に2回、スーパーバイザーの大学教員により、子どもにも「つばめの姿勢」の説明を行った。またスーパーバイザーから、C小学校の子どもの特徴として、足が机の中に納まらない、鉛筆や箸の持ち方が不適切、学習や給食時に正しい姿勢が保てない、行動の見通しが持ちにくい、自分たちで問題を解決できない面がある（大人に頼る）、集中力が続かない面がある、遅くまで起きていて睡眠時間が少ない等が指摘され、3学期からつばめの姿勢を授業開始時に実施している。

その他、現在行っている「体」づくりとして、中央っ子サーキットを参考にしたサーキット活動、全校集会でマーキングを使用した前後の距離の意識づくり（写真6）、体育館に的当て板・ハイタッチ板・ケンパゾーンの設置などに取り組んでいる。またクラス合同で体育を行い、子どもの様子を教師間で共有している。現在の課題としては「学校だけで行えるものではないので、学校だよりなどで家庭への啓発、情報発信を行っていく必要がある」等が挙げられた。



写真6 神門三郎氏より提供（2015年1月30日）

## ④ 「体」づくりによる子どもの変化

現時点では大きな変化は見られていないものの「学習発表会を見ると体育座りを長い時間保持できるようになってきたのではないか」「サーキット活動では、量をこなすことから一つひとつの動きの質を見るようになった」「具体的な成果としてみられるのは3年後ではないか」等が回答された。

## 4. 4 松江市立D小学校

2014年11月13日に調査訪問（18:30～19:00）して、1年生学級担任に半構造化面接を実施した。D小学校は松江市東部に位置し児童数426名の中規模校であるが、今後児童数の増加が予想される。新興住宅街が校区にあり、若い保護者が多く、保護者間のコミュニティを持っていない場合が多い。研究指定は受けておらず、面接法調査に協力していただいた1年生学級担任は独自に「体」づくりを行っているものの、学校全体での取り組みには至っていない。

## ① 子どもの実態

子どもの「体」の様子については「姿勢が崩れやすい」「座り方を経験してきていない」「指と言葉が合わない」「言葉は達者な反面、6歳児としてできることができていない」「よく転ぶ」「高学年でも飛び降りた際の着地で骨折するなどケガが増えた」「集団登校で列になって歩けない」「体力的に学校までの行き帰りができない」等が回答された。

## ② 「松江市保幼小接続カリキュラム」の実施後

「カリキュラムで提示されている子どもの課題が、実際の子どもの実態と合っている」「実際にサーキット活動を取り入れてみると、子どもが動けない、体を動かせないという姿を見ることができ驚いた」と回答された。

## ③ 「体」づくりの取り組み

D小学校では面接法調査に協力していただいた1年生学級担任が、学年の先生を巻き込んで1年生の中で取り組んでいる。しかし、サーキット活動に留まっている。今後、本格的に取り組んでいくためには「スキマの時間でうまく取り入れていく」「体育の時間に少しずつ取り入れていくといった方法で進めていきたい」と回答された。その一方で「自分たちの見立て・実態把握が適切なかが分からないので、専門家に1度見立ててもらえると進めやすい」「学校全体を挙げて取り組まなければ、他の教員に理解してもらえない」「教員間の情報共有、子どもを視る共通理解が大切であるので、管理職・教育委員会の関わりがほしい」「教育委員会は学力向上を全面的に進めているため忙しい」といった「体」づくりの研究指定を受けていない学校独自の困難が示された。

## ④ 「体」づくりによる子どもの変化

自主的に取り組んだサーキット活動では「1学期にできなかった動きが2学期にはできるようになった」「やったことに対しては効果がある」「幼児期からの継続した「体」づくりの取り組みの必要を感じた。保幼小が連携しながら取り組んでいかなければならない」と回答された。

## 5. 松江市の幼稚園・保育所における「保幼小接続カリキュラム」の現状調査の結果

## 5. 1 松江市立A幼稚園

2014年11月12日に調査訪問(11:00～12:00)して、A幼稚園長に半構造化面接を実施した。A幼稚園はA小学校と同じ敷地内にある。「体」づくりの取り組みに関してはA小学校と連携して、2012年度から特別支援教育スーパーバイザー派遣事業として取り組み、現在も継続している。

## ① 子どもの実態

2012年度の特別支援教育スーパーバイザー派遣事業の開始時に見られた子どもの「体」に関する課題として、「友達の話に対して反応がない」「じっとして話を聞く、話すことができない」「ぶつかる、つまづくことが多い」など、身体の不器用に加えて、コミュニケーションに関わる体の課題も挙げられた。

## ② 「松江市保幼小接続カリキュラム」の実施後

「一番大きな変化は、指導する側が意識を少し変えて、子どもの活動を見直すことができた」という回答があった。例えば「子どもの絵に関して、耳を描ける子は聞けるようになっていくといった見取りの視点が増え、子どもの実態把握がしやすくなった」と述べられた。

## ③ 「体」づくりの取り組み

実態調査として、グッドイナフ人物画検査、眼球運動検査、立ち幅跳び、片足立ちを行っている。グッドイナフ人物画検査、眼球運動検査の採点は、特別支援幼児教室のリソースを活かし、小学校と連携して行っている。さらに子どもが自然に遊べるような環境作りに取り組んでいる。またワクワクタイムという朝の体操やダ

ンスを行う時間があり、3歳児クラスから5歳児クラスまで一斉に行っている。動きの難度を変えることで、全体の中で一人ひとりの子どもの発達をみる機会、教員間で全ての子どもの発達を共有する機会にもなっている(写真7～写真9)。



写真7 森山諭美氏より提供  
(2015年1月26日)



写真8 森山諭美氏より提供  
(2015年1月26日)



写真9 森山諭美氏より提供(2015年1月26日)

#### ④ 「体」づくりによる子どもの変化

3年間取り組みを行っているA幼稚園からは「座る姿勢、手の上げ方、鉛筆の持ち方が良くなった」「ぶつかることが少なくなった、ふんばって止まれるようになった」「ぞうきんがけが廊下の端から端までスムーズにできるようになった」「体育座りの姿勢がきれいになった」と回答された。また、子どもの変化だけでなく「教職員同士で子どもの情報、取り組みの意図などをより共有するようになった」という回答も示された。

### 5. 2 松江市立B幼稚園

2014年11月11日に調査訪問(13:30～14:45)して、B幼稚園長に半構造化面接を実施した。B幼稚園はB小学校に隣接しており、B小学校が今年度から研究指定を受けたことに併せて、本園でも取り組みを始めている。

#### ① 子どもの実態

「じっとして話を聞く、話すことができない」「すぐに机にもたれかかる」「動きがぎこちない」「きれいな姿勢でまっすぐ歩けない」「ぶつかることが多い」等が回答された。また「どのように関わっていけばよいのかわからなかった」と子どもの「体」の発達に関する変化を感じながらも、どのように対応すればよいのかわからなかったと述べている。

② 「松江市保幼小接続カリキュラム」の実施後

「指導側が理解をして活動を行わなければならないという意識が生まれた」「園庭や保育室などの環境に意味づけをして遊びの環境設定を意識するようになった」「当たり前の発達が未発達であるということに気付いた」「現在の活動が小学校生活とどのようにつながるのかが見えるようになった」と回答された。

③ 「体」づくりの取り組み

子どもの歩く経験が少ないことから、「歩こう隊」という名前で、園を挙げて散歩に力を入れて取り組んでいる。「歩こう隊」自体は以前からあったものだが、何のために散歩をするのかについて教職員間で共通認識をもって取り組んでいる。さらに地域の協力で造り上げた竹アスレチックを遊び場として使用したり、園の入口に「ケンパ」のゾーンを設ける等の取り組みを行っている（写真10～写真11）。



写真10 井上晴美氏より提供 (2015年1月19日)



写真11 井上晴美氏より提供 (2015年1月19日)

④ 「体」づくりによる子どもの変化

園長が毎朝、園入口で行っているハイタッチの際に「5歳児でもタッチする手を見て跳べない子が多かったが、手を見て跳べるようになってきた。3歳児でも手を見て跳べる子が出てきた」「子どもが無意識のうちに体を動かすようになった」と回答された。また「かしこい体」づくりについての講話会を開催し、家庭で取り組める遊びの提案を行ったところ、車で通園していた親子が徒歩で登園したり、自分の子どもは手首の反り返りができないことがわかったなど、保護者にも意識の変化がおきていると回答された。

5. 3 松江市立C幼稚園

2014年11月13日に調査訪問 (15:20～16:15) して、C幼稚園長に半構造化面接を実施した。C幼稚園はC小学校に隣接しており、C小学校が2014年度から研究指定を受けたことに併せて、C幼稚園でも取り組みを始めている。

① 子どもの実態

「外で集まって遊ぶことがない」「遊びの経験が少ない」「じっとできない」「小学校に就学したときの動きの差は、運動能力の差ではなく、一人ひとりの体験の違いからくる差が大きいと感じている」と回答された。

② 「松江市保幼小接続カリキュラム」の実施後

「発達段階に合わせて、指導側が意識して、さまざまな動きの体験をバランスよく経験させることが必要であると感じた」「カリキュラムができたことから、幼稚園・小学校に関係なく、運動や動きの系統化が大切である」と回答された。

### ③ 「体」づくりの取り組み

C幼稚園では、松江市保幼小接続カリキュラムだけでなく、「びゅーん・ぐるぐる、ころころ・くるくる、ぴっとなる、つっぱり、バランス、タイミング、跳び乗り・跳び降り、捕ったり投げたり、アクセント、リズム」の10種類の運動感覚の視点も併せて活用している。この視点を持ち、従来から取り組んでいる「元気っ子体操」において多様な動きを経験させている。

### ④ 「体」づくりによる子どもの変化

「現在のところあまり変化は見られない」「幼児期に多様な動きを経験することの必要性は感じており、今後何か見えてくると思う」と回答された。

## 5. 4 松江市立D幼稚園・保育所

2014年11月12日に調査訪問（14:00～15:00）して、D幼稚園・保育所長に半構造化面接を実施した。D幼稚園・保育所は松江市東部に位置しており、幼稚園と保育所が併合されているために幼児数も多い。特別支援幼児教室が設置されている。「体」づくりの取り組みについては、研究指定などは受けていないものの、その必要性は感じており、独自に取り組んでいる。

### ① 子どもの実態

「動きが止まらない」「けがが多く、転んだときやつまずいたときに手をつけないで顔をけがする子どもが増えたのが印象的である」「首がすわるのが遅く抱きにくい」「手先が不器用」「すぐに疲れる」と回答された。

### ② 「松江市保幼小接続カリキュラム」の実施後

「体という子どもの発達をとらえる新しい視点を得ることができたことで、活動を意識して行うようになった」「集団で取り組む場合にも、一人ひとりの発達をみていくことをより意識するようになった」「教職員間で意識の共有も行いやすくなった」等が回答された。

### ③ 「体」づくりの取り組みと課題

D幼稚園・保育所は、研究指定は受けていないものの、2013年から独自に「体」づくりの取り組みを行っている。0歳児から5歳児の活動計画表が作成され、それに基づき活動を行っている。朝、体操の時間を設けて、0歳児から5歳児まで全員で体操を行い、その後、固定遊具で遊ぶ時間を設定している。またD幼稚園に設けられている特別支援幼児教室の教員からのアドバイスを得られることは大きい。

児童の実態把握や教職員間での共通理解が重要になるが、幼稚園と保育所が併合されているので、全職員での話し合いは午後7時以降でないと集まれず、子どもの情報共有がスムーズに行えない。また臨時職員も多く、取り組み内容が積み上がっていかないという課題もある。

### ④ 「体」づくりによる子どもの変化

「散歩で歩くのがうまくなった」等が回答された。

## 6. おわりに

本稿では、子どもの身体の発育・発達に着目して作成された「松江市保幼小接続カリキュラム」の成り立ちや内容の検討を行うとともに、松江市の幼稚園・保育所・小学校における「松江市保幼小接続カリキュラム」の実際の取り組みの成果や課題についての調査を通して、子どもの身体の発育・発達に焦点を当てた接続期の発達支援の意義や課題について明らかにしてきた。

子どもの身体の発育・発達に焦点をあてて発達支援を行う意義として、①他の接続カリキュラムの内容と比較しても、実施に時間的制約が少ないこと、②児童が学校で生活するための「基盤・当たり前」を教職員が見つけ直す意識をもてると考えられる。一方で、子どもの身体の発育・発達の実態把握には不十分さを感じてい

ることが明らかとなり、今後は各学校で子どもの身体の発育・発達の実態把握を行う研修が必要である。

さらに、松江市における「保幼小接続カリキュラム」の現状調査の検討を通して、接続期カリキュラムの実施において重要なこととして、①幼稚園・保育所・小学校がカリキュラムの必要性を感じている、②カリキュラムの実施の負担が少ない、③カリキュラムを実施することで子どもに変化がみられる、の3点が析出できた。

まず「①幼稚園・保育所・小学校がカリキュラムの必要性を感じている」という点であるが、今回の調査では、全ての幼稚園・保育所・小学校から子どもの「体」に関して気になる点が挙げられた。「子どもの実態と合っていたので必要ということは納得できた」との回答のように、「かしこい体」づくりは子どもの実態に則した内容であり、受け入れやすいものであったと考えられる。

次に、「②カリキュラムの実施の負担が少ない」ことであるが、「かしこい体」づくりは、幼稚園・保育所・小学校の教職員間の意識を変えることができればすぐに実施できる内容であり、そのことはカリキュラム浸透においてきわめて重要である。

「③カリキュラムを実施することで子どもに変化が見られる」点は、今回の調査では、約3ヶ月間の取り組みでようやく子どもに変化が見られ始めるという実感が語られたように、変化を実感できるまでの期間、いかに取り組みを継続するのが「体」づくりの課題である。

なお、子どもの身体の発育・発達に着目して作成された「松江市保幼小接続カリキュラム」は、発達の困難を有して、個別の配慮・支援が必要な幼児・児童の早期発見・対応にもつながると考えられる。発達障害やそれに類似した発達の困難を有する子どもは「姿勢保持ができない」「椅子にもたれかかってしまう」「動きがぎこちない」「まっすぐ歩けない」「ぶつかったり、転倒することが多い」「すぐに疲れる」といった身体発達の困難を高い割合で有している（高橋・石川・田部：2011、高橋・田部・石川：2012、高橋・井戸・田部・石川・内藤：2014）。

このような身体発達の困難は、今回の調査で幼児・児童の実態として挙げられた回答と重なる部分があり、「かしこい体」プログラムの支援により改善がみられたという報告もあった。このことから「かしこい体」づくりの取り組みは、一斉指導・集団活動において、個別の配慮・支援が必要な子どもに対しても有効な発達支援を行える取り組みであるといえる。

## 文献

- 松江市教育委員会（2012）「平成24年度第18回松江市教育委員会会議録」。
- 松江市教育委員会（2013）「松江市保幼小接続カリキュラム—すくすくアプローチ！わくわくスタート！—」。
- 松江市教育委員会（2014）「平成26年度第1回松江市教育委員会会議録」。
- 文部科学省（2006）「幼児教育振興アクションプログラム」。
- 文部科学省（2010）「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続について」。
- 鳥根県教育センター教育相談スタッフ特別支援教育セクション（2008）体作りを通して学習に向かう力を育てる（1年次）  
—小学校低学年の読み書きと学習規律に視点をあてて—、『平成20年度研究紀要』鳥根県教育センター。
- 鳥根県教育センター教育相談スタッフ特別支援教育セクション（2009）学習に向かうための見取りと体づくりの提案（2年次）  
—小学校低学年の読み書きと学習規律の基盤を整える—、『平成21年度研究紀要』鳥根県教育センター。
- 鳥根県教育センター教育相談スタッフ特別支援教育セクション（2010）学習に向かうための見取りと体づくりの提案（3年次）  
—小学校低学年の読み書きと学習規律の基盤を整える—、『平成22年度研究紀要』鳥根県教育センター。
- 高橋智・石川衣紀・田部絢子（2011）本人調査からみた発達障害者の「身体症状（身体の不調・不具合）」の検討、『東京学芸大学紀要（総合教育科学系Ⅱ）』62。
- 高橋智・田部絢子・石川衣紀（2012）発達障害の身体問題（感覚情報調整処理・身体症状・身体運動）の諸相—発達障害の当事者調査から—、『障害者問題研究』40（1）。
- 高橋智・井戸綾香・田部絢子・石川衣紀・内藤千尋（2014）発達障害と「身体の動きにくさ」の困難・ニーズ—発達障害の本人調査から—、『東京学芸大学紀要（総合教育科学系Ⅱ）』65。

# 就学前教育と小学校の接続・連携に関する調査研究

——「松江市保幼小接続カリキュラム」の検討を通して——

## Study of Connection and Cooperation between Pre-School Education and Elementary School: Curriculum for Connecting Kindergartens Nursery Schools to Elementary School of Matsue City

赤木 信介\*<sup>1</sup>・田部 絢子\*<sup>2</sup>・石川 衣紀\*<sup>3</sup>・内藤 千尋\*<sup>4</sup>・高橋 智\*<sup>5</sup>

Shinsuke AKAKI, Ayako TABE, Izumi ISHIKAWA, Chihiro NAITOH and Satoru TAKAHASHI

特別ニーズ教育分野

### Abstract

This study analyzed establishment and contents of “Curriculum for Connecting Kindergartens Nursery Schools to Elementary School of Matsue City” that was drawn up considering growth and development of children, and clarified actual situation and significance of developmental support in connective period of Matsue City through interview survey.

The method was following: 1. Establishment of “Curriculum for Connecting Kindergartens Nursery Schools to Elementary School of Matsue City;” 2. Interview survey of actual situation and issue of that curriculum of Matsue City. The subject of the interview survey were kindergarten, nursery, elementary schools, and board of education of Matsue City. The contents of the interview survey was state of implementation of body development of the curriculum of Matsue City, and survey period was November 2014.

Significance of developmental support considering physical growth and development of children was following: 1. the less temporal restriction against other connective curriculum; 2. Rise in awareness of teachers about consideration the base of school life for children. However, it was clarified that teachers have had difficulty of grasp the physical growth and development of children. Accordingly, the teacher training about physical growth and development of children is indicated.

**Keywords:** cooperation between nursery, kindergartens and elementary schools, connection and cooperation curriculum, Matsue City

*Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本稿では、子どもの身体の発育・発達に着目して作成された「松江市保幼小接続カリキュラム」の成り立ちや内容の検討を行うとともに、松江市の幼稚園・保育所・小学校における「松江市保幼小接続カリキュラム」の実際の取り組みの成果や課題についての調査を通して、子どもの身体の発育・発達に焦点を当てた接続期の発達支援の意義や課題について明らかにしてきた。

---

\*1 Matsue City Hokki Elementary School (532 Hitsu-tyo, Matsue-shi, Shimane, 690-0863, Japan)

\*2 Osaka University Of Health and Sport Sciences (1-1 Asashiro-dai, Kumatori-cho, Sennan-gun, Osaka, 590-0496, Japan)

\*3 Nagasaki University (1-14 Bunkyo-cho, Nagasaki-shi, Nagasaki, 852-8521, Japan)

\*4 Shiraume Gakuen University (1-830 Ogawa-cho, Kodaira-shi, Tokyo, 187-8570, Japan)

\*5 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

研究の方法は、松江市保幼小接続カリキュラムの成り立ちの検討、松江市保幼小接続カリキュラムの実際的な取り組みの現状と成果・課題についての調査である。調査対象：松江市の公立幼稚園・保育所4園、公立小学校4校、松江市教育委員会。調査内容：松江市保幼小接続カリキュラムの「体」づくりの実際的な取り組みの状況に関する調査。調査方法：半構造化面接法調査。調査期間：2014年11月。

子どもの身体の発育・発達に焦点を当てて発達支援を行う意義として、①他の接続カリキュラムの内容と比較しても、実施に時間的制約が少ないこと、②教職員が学校で生活するための基盤＝当たり前を見つめ直す意識づくりができることが考えられる。一方で、子どもの身体の発育・発達の実態把握においてつまづきを感じていることがわかった。今後、各学校で子どもの身体の発育・発達の実態把握を行う研修が必要である。

キーワード：保幼小連携、接続・連携カリキュラム、松江市